★３学期Ⅱ期２月～終了　教育課程(指導計画)★

＜年少・れんげ＞

　これまでの異年齢の交流を通して、年長・年中が作った製作物に関心を持ち、自分にも作って欲しいという気持ちが出てきます。そして、年長・年中が自分たちのために作ってくれることを期待し、お店やさんを楽しみに待ちます。また、自分たちが作ったものを、他学年に認められて嬉しいという気持ちから、作ってあげたいという気持ちになっていきます。そして、実際に作ることで、年少のお店屋さんにつなげていきます。
　他学年のお店屋さんに参加することで、お金と品物のやりとりに必要な対応、言葉などを確かなものにしていきます。その体験を自分たちが売る側になったときに、何をどうすれば良いのかを考えたり、必要な準備を主体的に取り組んで行きます。
　お店屋さんなどでの進級する学年児との触れ合いの中で、次に自分がなりたい姿を具体的に体験することで、進級への意欲も高まります。そんな中、成長欲求を確かな成長感と自己肯定感につなげていく活動を行います。そこでは、保護者にもおわかれ会という形で参観をしてもらい、子どもとその聖地洋館を共有してもらうことで、自己肯定観をさらに強く感じていけるようにします。
　年少の子どもたちは、おわかれ会を主として社会生活の中で初めての「別れ」というものを体験していきます。中には、そのことに不安を感じるようなこともあると思われますが、丁寧な別れを保育者が心がけることも大切なことです。
　この時期、年間で寒さのピークを迎え、それが三寒四温というように緩んでいきます。少しずつではありますが、季節が春を迎えるその足音を子どもたちと感じていきたいと思います。

＜年中・たんぽぽ＞

　ものをつくる、その先の活動としてお店屋さんごっこにつなげていきます。きっかけは、昨年、参加した年中のお店屋さんで印象的な品物をこの時期につくることで、自分たちもお店屋さんでその品物をみんなに売ってあげたいという気持ちになってきます。さらに、お店屋さんをするために必要なこと、品物の種類、数、店舗づくりなど昨年の体験を元に主体的にあそびを広げていきます。
　その中で、物事の客観視ができるようになり「丁寧に作った物は喜ばれる」というような価値観に気づき、ただつくるのではなく、丁寧さをどう実現させるか？を考えて活動していく姿が出てきます。
　この時期、生活のいろいろな場面で進級を意識した言動が見られるようになります。自分は、どうあるべきか？ということを意識できるようになり、その姿に近づけようという意欲が出てきます。それが自己実現としての「おわかれ会」へとつながります。別れを意識し、その先を見据え、乗り越えていく体験をしていきます。
　そんな中、寒さが緩む中で、春を感じることを通して、ただ季節が変わるということだけではなく、自分の成長感を重ね、次への期待感が膨らみます。

＜年長・すみれ＞

　年長すみれの木工あそび、マジックハンド製作はすみれとしてのステイタスです。そして、お店屋さんあそびにつながっていことの期待感を子どもたちは感じます。これまで体験し身につけてきたことを、おもちゃづくりや店舗づくり、さらに売り方の工夫へと主体的に活動が展開していきます。その要所要所で子どもたちの想いが実現できるように、保育者が援助をして支えていきます。

　そんな協同的活動を通して、クラスとしての結束が高まる中で、幼稚園生活がひとつひとつ終わっていくことを意識し始めます。そして、進学にあたり、どういう自分であるべきか？という意識も自覚されてきます。それを「おわかれ会」という保護者参観で行われる活動を通して、進学への自信につながるように保育者は、援助をしていきます。
　幼稚園生活最後の活動である卒園式は、子どもたちが何のためにどうして行うものなのか、それを知ることで、是非、やりたいという気持ちになれるような設定をします。また、式を行うか行わないかを子どもが決め、それに必要なことは何かの見通しを持てるようにしていくことで、主体的に取り組むことも可能になってきます。そして、この活動を通して、人生における別れの本質（出会いのための別れ）に触れていきます。